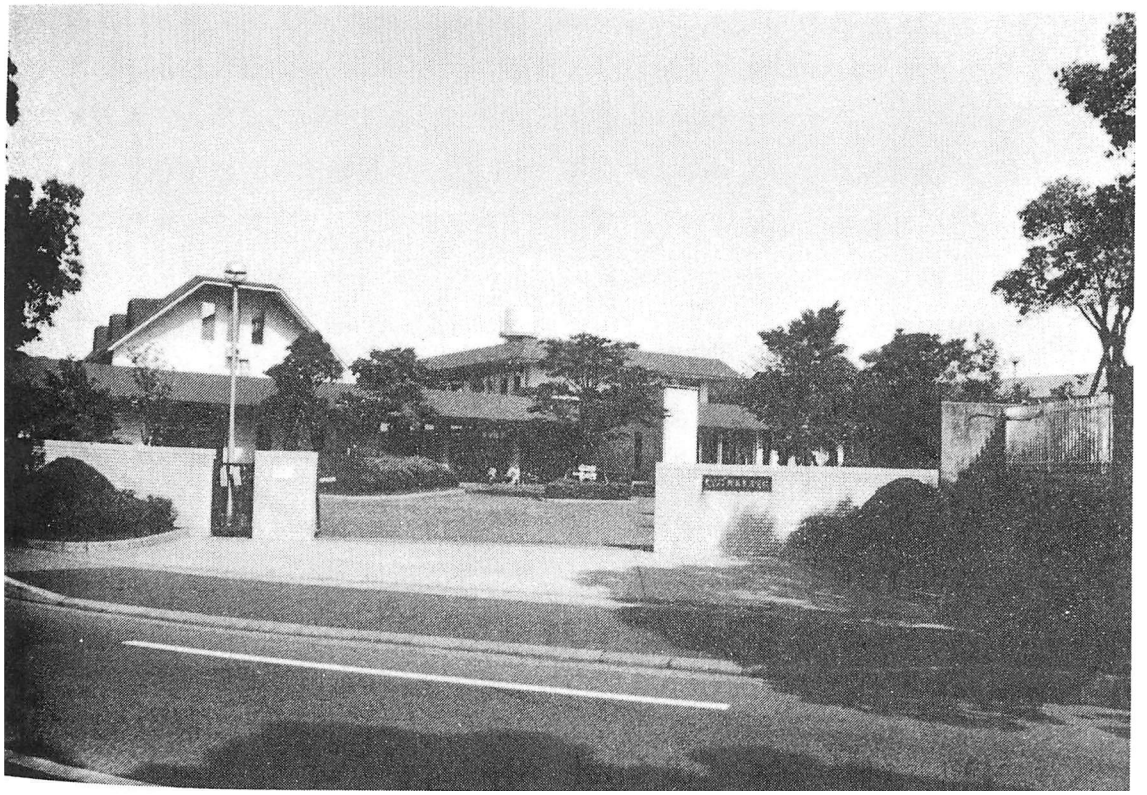
かかわり合いの豊かな子どもをめざして



昭和63年2月

鹿児島大学教育学部附属養護学校

はじめに

学校長　木佐貫　哲

本校は，現在地に移転して6年，その間校内の施設・設備，教官組織も年々充実し，附属養護学校としての形態も一応整備されてまいりました。しかし，在籍する児童生徒の実態は障害児教育の義務制への浸透の高まりにより，当初の中度の障害を主体とするものより年を追って重度化，多様化への質的変化の傾向がうかがえます。このような児童生徒の質的変化のなかで，本校における教育研究の課題も当初の「発達に即応した教育課程の編成」より，「生き生きと動く子どもを育てる教育課程の編成」へと内容的焦点化を図り，昭和60年度一応その研究成果をまとめ，公開発表いたしました。次いで翌年の昭和61年度からは，基本的にはこれまでの研究成果を踏襲するなかで，その内容的発展をさらに期待するため，「かかわり合いの豊かな子どもをめざして」という研究課題を設定し，これらに関する参考文献の収集，それらの内容についての検討に努めました。昭和62年度は，その1年間にわたる研究の成果にもとづいて，まず，子どもたちの実態についての的確な把握を得るため，「意図性」「調整度」「協約性」の三視点より，子どもたちの行動の観察を主体とした調査研究をおこないました。そして，さらにこれらの研究の思考の過程として，「人や物とのかかわり」をささえるものとして，「身体」「認知」「情緒」の三基盤を考え，それらの関係を含めて研究の範囲を拡大し日々実践研究を推進いたしております。これらの研究は，その内容的性格より学問領域としての幅も広く，短期間での研究目的への達成には多くの困難性が予想されます。したがって，本研究の推進に当たり本校では一応4か年の研究期間を設定し，年次計画による研究態勢を図り，本論で述べる内容は，昭和61年度以降2年間の研究の成果を示すもので，「豊かなかかわり合い」に関する研究の，その一端を公開いたしたものです。諸先生方の忌憚(たん)のない御批判，御叱(しっ)正をたまわれば幸いと存じます。

尚，この研究を推進するに当たり，常に懇切な御指導をいただいた大学，県市各教育委員会，教育センターの諸先生方に，深甚の謝意を表する次第です。

総　目　次

はじめに …… 校　長　木佐貫　哲

第一部　序　論 …… 1

第二部　かかわり合いの豊かな子どもをめざして …… 15

第三部　子どもたちをどのようにみていくか …… 24

第四部　豊かなかかわり合いをささえているもの …… 72

おわりに …… 副校長　横　山　和　幸